

指導資料



鹿児島県総合教育センター

英語 第58号

- 高等学校，盲・聾・養護学校対象 -

平成15年9月発行

実践的コミュニケーション能力の育成を目指す効果的指導 - ディベート活動の指導を通して -

今年度から，高等学校でも新学習指導要領が導入された。外国語科では，「実践的コミュニケーション能力の育成」が，中核をなす目標として挙げられている。

そこで，本稿ではこの実践的コミュニケーション能力の育成を目指す効果的な指導について述べる。

1 実践的コミュニケーション能力とは

実践的コミュニケーション能力とは，外国語の音声や文字を使い，外国の人々とコミュニケーションを図ることができる力のことである。つまり，外国語を聞いたり読んだりすることで，情報や相手の意向などを理解したり，自分の考えなどを外国語で表現したりして通じ合うことができる力のことである。

また，実践的コミュニケーション能力は，「言語や文化に対する理解」や「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度」と深くかかわっている総合的な力とも言える。言語や文化に対する理解が深まれば，コミュニケーションに対する態度面も向上し，実践的コミュニケーション能力が一層効果的に発揮できるようになる。逆に，実

践的コミュニケーション能力が高まれば，言語や文化に対する理解はもちろん，態度面も一層深まっていくと言える。そのため，実践的コミュニケーション能力は，これらの三つの要素がスパイラルに影響し合うことで，より一層向上していくことが期待できる。

2 リスニング力の育成に向けて

実際のコミュニケーションの場では，聞くこと，話すこと，読むこと，書くことの4領域が複合的に絡み合っていることが多い。そこで，授業では言語の使用場面やその働きを有機的に組み合わせたり，他の領域と関連付けた総合的な活動を取り入れたりするなど，生徒が情報の受け手や送り手となるような活動を行うことが求められる。

このような活動の一つに，ディベート活動がある。ディベート活動は，4領域にわたった総合的な力を必要とする。ここでは，4領域の中でも特にリスニング力とスピーキング力の育成を目指した指導に焦点を当て，指導の工夫やその留意点などについて考える。

(1) リスニング力の育成に向けて

ディベート活動では、相手の英語を正確に聞き取ったり、相手の意向を受け取ったりすることができるリスニング力が必要とされている。この力の育成を目指す指導法には、様々なものがある。ここでは、その中の幾つかを紹介する。

ア リスニング教材

リスニング指導に使用する教材は、生徒の意識ができるだけ音声とその内容に集中できるように、語句や文、文法事項など、言語材料に対する抵抗が少なく、理解しやすいものにしたい。

例えば、1 学年下の教科書の内容や、他社の前学期のものの利用が考えられる。

イ 相互作用的なリスニング活動

聞くことだけに終始しないで、積極的に英語にかかわっていく相互作用的なリスニング活動も有効である。これは、対話を聞き、一方の話者の立場で応答を書いていく活動である。一般的に行われている受動的なリスニング活動よりは、学習者が積極的に対話にかかわっていくので、能動的なリスニング活動が実践できる。

ウ LL 教室の活用

普段の授業時以外でも行えるリスニング学習の機会として、昼休みや放課後などに LL 教室を開放して生徒が自主的に学習する方法が考えられる。

事前にエンドレステープやハードウェアにディクテーションや Q & A など、レベルや内容の異なる英文を録音しておき、それを数チャンネル使って流す。生徒は、

各自の目的に応じたチャンネルから英文をテープや MD などにコピーし、自由に聞き返し、それぞれの課題に解答する。

その後、教室内に掲示してある模範解答を基に添削し、提出する方法である。

今後、大学入試センター試験でリスニング問題が導入されることなどを考えると、有効な学習方法と思われる。

(2) スピーキング能力の育成に向けて

実際の会話の場面において、聞き手は単に話し手に耳を傾けているだけの受動的な存在ではない。聞き手のかかわり方次第では、話し手は話の腰を折られたり、意図したメッセージが伝わらなかったり、誤解されたりすることがある。そこで、コミュニケーションが断絶することなく相手に十分理解してもらえるように、繰り返し (repetition)、言い換え (paraphrase)、難しい表現の回避 (avoidance)、つなぎ言葉 (fillers) などを使ったりする指導が必要である。この方法は、実践的なスピーキングに必要不可欠な方略能力 (strategic competence) である。

また、表現力や伝達力等の育成のため、授業の始めに英語による 1 分間スピーチを行うことがある。その際には、Show and Tell 法を用いて発表する方法を勧めたい。これは、物を見せながら語るもので、具体的なイメージを聞き手に容易に与えることができ、理解しやすくなるという利点がある。

その他、レシテーションやスピーチ、スキット、ドラマ作りなどの場を設定し、生徒が英語で発信する機会を作ることが大切である。

3 ディベート活動の指導上の留意点

様々な活動から身に付けたコミュニケーション能力を用いてディベート活動を行う前に、実施方法やリサーチ、原稿作成、表現や語句などについて指導する必要がある。

(1) 実施方法

ディベートの実施方法は、人数や時間などにより様々である。基本的な流れとしては、トピックに対する立論 (constructive speech)、反論 (rebuttal speech)、まとめ (summary speech) のそれぞれを、肯定側と否定側が行う。このほか、立論の後に質疑 (cross examination) が入る場合もある。

1 チーム 3 人で行う場合には、 A_1 (肯定側) N_1 (否定側) $A_2 \cdots N_3$

A_1 の順番で発言していく「ピンポン・ディベート」が、順番が明確で流れが分かりやすく実施しやすい。その際、「発言内容に意見、理由、具体例等を一つずつ含め、前の相手が述べたことに必ず言及する」等の約束事を入れるのもよい。

なお、英語で実践する前に同じトピックを用いて日本語で練習をしておくと、生徒の理解も深まり、うまくかみ合ったディベートとなる。

(2) テーマへのリサーチ・原稿作成

ディベートのテーマは、生徒の能力・適正、興味・関心などに応じた話題から設定することが重要である。まず、テーマに関する必要な情報や資料を、図書館やインターネットなどを利用したり、関係機関へ問い合わせたりして収集させる。

次に、集めた資料や自分たちの考えを基にグループでアイデアを出し合い、ブレインストーミングを行わせる。アイデアが出尽くした段階で、利用する資料や意見を取捨選択して原稿作成に移る。

原稿作成の際には、自分たちの主張をはっきりさせ、伝えたい情報や考えを論理的に組み立てるように指導する。また、ポイントだけを書き出し、アウトラインを作ってから原稿を完成させる方法は、論の展開がはっきりして取り組みやすい。

そのほか、和英辞典に頼った英語への置き換えではなく、既知の単語や表現を用いて聞き手に伝わるように言い換える工夫や、具体例の提示なども必要である。

(3) 表現・語句

ディベートでは、賛成・反対をしたり、主張・説得をしたり、また、質問や示唆をして相手の行動を促したりすることなどが求められる。そこで、We support / oppose the position that..., We can therefore conclude that..., Are you saying that....? などの、よく使用する表現は事前に指導しておく必要がある。

上述のような活動を通したディベートの実践まで到達することが難しい場合には、「紙上ディベート」を活用してみたい。

これは、隣り合わせに座っている生徒同士が、一つのテーマについて賛成・反対の立場から英文を書いて議論を進めていく活動である。リスニングやスピーキング力の向上にはつながらないが、リーディングとライティング力を活用し、向上させていく活動として有効である。

4 ディベート活動の実践例

1 指導対象者等

(1) 学 年 高校2年生

(2) 教科書 *PROGRESSIVE ENGLISH COURSE II* [Revised Edition] Lesson 3 Why and Because

2 活動の位置付けと目標

本文の読解終了後、本文の内容を題材にしたディベートを実施(2時間)。本文の内容との関連を強く意識させ、読解で知り得たことも活用させるため、教科書の演習問題よりも先に取り扱う。また、生徒自身の考えを述べる機会を作り、現実に近いコミュニケーションの場を目指す。

3 具体的な取組

(1) 事前準備・指導

・ ディベート実施予告のため、予習プリントに次のような問いを設定する。

ア 本文中の二つの疑問について、自分の意見で答えよ。

イ Let's debate under the proposition:

The seniority system is good for us.

・ 授業では、「本文では～な考えが紹介されているが、自分自身の考えはどうか?」という問い掛けを増やし、「自分の意見で」という部分を意識させる。

(2) 1時間目

・ 肯定派と否定派のチームをそれぞれ2組作り、次の2点を考慮して日本語で実施する。

ア ルールや試合の進め方を確認する。

イ 討議内容の深化を図る。

・ 以下の採点基準を事前に示しておき、採点は指導者が行う。

ア 論題の分析ができているか。

イ 相手に分かりやすい言葉遣いであるか。

ウ 的確な質問ができているか。

エ 相手に伝えるための工夫があるか。

オ 矛盾等のない首尾一貫した主張ができているか。

・ 日本語で試合を行ってから、双方の意見の展開や議論の進め方についてコメントをし、良かった点と改善すべき点を指摘する。

・ 肯定派と否定派のチームをそれぞれ2組作り、英語によるディベートの準備をする。

日本語で行った内容を英語に変換していく作業を中心にする。英語表現に関する質問が出たときには、生徒の手で英文を作っていくように促すために、最小限のヒントのみを教えるようにする。生徒は和英辞典を引いたり、教科書の表現を借用することで対応する。

・ 1チームあたり的人数が少なく、「一人一役で、全員が一度は発言する」ように分担する。

(3) 2時間目

・ 英語での対戦を実施する。「一回戦」を2試合行い、各チームについての採点結果で順位を決定する。前述の採点基準に加え、今回の指導目標に合わせた以下の点についても観察して評価する。

ア 題材自体を理解できていたか。

イ 読解で学んだことを活用できていたか。

ウ 自分自身の考えを述べていたか。



(県立種子島高等学校 梶 一宏教諭の実践を基に作成)

これは、読解の学習後にディベートを設定した実践例であるが、普段から授業で「～についてどう思う」「～に賛成? 反対?」という問い掛けをしておけば、生徒はおのずとその観点から英文を読むようになる。このような指導を繰り返すことが、読んでいる内容と自分の思考とを結びつけることができる生徒を育成することになる。また、ディベートでは、肯定側と否定側の両面からテーマを分析することや、自分の主張をしっかりとしたデー

タや専門家の証言で理由付けすることが要求されるので、物事を客観的にみるとともに論理的に話そうとする習慣も身に付く。

今後、各学校がディベートをはじめ様々な活動を通して、実践的コミュニケーション能力の育成を一層図っていくことを期待したい。

【参考文献】

- 影浦 攻 『新学力観に立つ英語科の授業改善』
1996年 明治図書
- 中嶋洋一 『英語のディベート授業 30の技』
1997年 明治図書

(第一研修室)

